



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	J-POPの音楽構造を用いた旋律創作方法の開発(全文の要約)
Author(s)	木下,和彦
Citation	
Issue Date	2017-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2309/147697
Publisher	
Rights	

J-POP の音楽構造を用いた旋律創作方法の開発
〈要約版〉

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科
平成 28 年度博士論文

芸術系教育講座 R13-7001

木下和彦

筆者は、子どもが学校外で得るインフォーマルな音楽経験、特に聴取経験が、音楽科の創作活動へ活用可能であると考え。日常生活の中で J-POP を中心としたポピュラー音楽を聴き親しむ日本の子どもは、すでにその聴取経験から得た音楽を創作するための基礎的な知識や能力を潜在的に有しているのではないか。そして音楽教育学は、それを活かすための具体的な実践アイデアについて、十分な知見をもたなかったのではないか。そこで本研究では、①J-POP の音楽構造の分析によって、J-POP 風の旋律をつくるための方法を構築・提案すること、②構築・提案した方法を用いて小・中学校にて実践を行い、その方法の有用性を検証すること、③実践を通して、音楽科の創作活動において J-POP を取り上げることの教育的意義を考察すること、以上の 3 点を目的として研究を行った。研究方法は、文献研究、音楽分析、実践研究の 3 つで構成される。なお、本研究においては、J-POP を「1990 年代以降に日本で生産された流行音楽」と定義した。

本研究は、序章から第 5 章にわたる全 6 章で構成される。

第 1 章では、本研究で対象とする創作及び J-POP・歌謡曲を取り上げた実践が音楽科においていかなる背景から、どのように行われてきたのかを先行研究から検討した。さらに、雑誌『教育音楽中学・高校版』における J-POP を用いた実践に関する記事の内容を分析した。その結果、これまでの音楽科における J-POP を用いた実践のうち創作に関するものは稀少であること、実践のための方法論が確立されていないことを論じた。

第 2 章では、J-POP が創作活動において有する教材的価値について先行研究に基づき考察した。具体的には、まず J-POP は音楽産業と切り離すことの出来ない音楽ジャンルであることを確認した。続いて、創造性を切り口として J-POP を創作することの教育的意義について、2 つの視点を提示した。1 つ目は、子どもがそれまでの音楽聴取経験から得てきた音楽構造（旋律やコード進行、音色、アレンジ）に関する知識が活動に活かされることであり、2 つ目は、その音楽的アイデアの活用過程において、子ども自身の音楽聴取経験を総体として活かしながら活動を行える可能性があることである。さらに、J-POP の聴取行動の在り方はマスメディアや周辺機器の進化に伴い変容していること、子どもはその変動を享受しつつ J-POP を聴取していると論じた。その上で、J-POP を教材化する上で大きな課題とされる流行現象への検討を通して、流行しているとみなす対象を「楽曲」や「アーティスト」ではなく「音楽構造」から見出し、そ

の構造を方法の基盤とすることを提案した。最後に、J-POP を創作教材と仕立てる上での基礎的な視点として、「流動的な要素」と「不変的な要素」の二層によって J-POP を捉え、実践を構想することを提案した。

第 3 章では、J-POP を創作教材として扱うための具体的な方策を構築するため、J-POP の音楽的特徴を析出するための 2 つの分析を行った。1 つは、「同音に連続傾向のある旋律」であり、もう 1 つは、「J-POP のメロディーにみられる『反復』『変化』『応答』」であった。これらから得た知見に基づき、2 つの旋律創作方法を提案した。

第 4 章では、第 3 章において見出した 2 つの方法を踏まえ、小・中学校において実践を行い、その授業データから J-POP を創作教材として扱うことの有用性と教育的意義について考察した。まず筑波大学附属小学校の実践では、「同音に連続傾向のある旋律」を活かした旋律創作方法の妥当性を確認するとともに、J-POP を創作教材として扱うにあたっての具体的な課題点を得た。それを踏まえ、さらにお茶の水女子大学で同方法を用いて授業を行った。結果、いずれの実践からも、J-POP を創作活動で扱うことの有用性は、J-POP の音楽構造は子どもが創作実践で活用可能な「足場」であること、そこで子どもは自身の J-POP の音楽聴取経験と関わりをもちながら創作出来ることに示された。また、当実践を香川(2011)が述べる日常生活での経験と学校教育での経験との境界を打破するための「越境の時空間」の観点から捉えることで、音楽教育学内部の議論に留まらず学際的な視点からも当実践の教育的意義が見出されることを論じた。これらの論考を通し、第 5 章では結論について次の 3 点を述べた。

・J-POP の音楽構造に基づいた旋律創作方法は、従来の音楽科の旋律創作方法に関連付けて展開することが可能である。

具体的には、2 つの方法を構築・提案した。1 つ目に、「使用音の限定・拡大」という従来の方法に対し、「同音に連続傾向のある旋律」の構造は適用可能な音楽的特徴であることが明らかとなった。2 つ目に、「『反復』『変化』『応答』」の活用という従来の方法に対し、J-POP もまたその構造を有している点で応用可能であることが明らかとなった。

またこの 2 つの方法はいずれも、コード進行による和声音の変化に対し、旋律の構成音をときにテンション音として位置づけることを認めることで、単一の旋律創作方法に様々なコード進行を組み合わせることができる。これによ

て、従来の J-POP の創作活動にみられた和声理論の学習を前提としない実践が可能となった。この点から、新たに J-POP 風旋律の創作方法を提示することが出来た。

・J-POP の音楽構造を用いた旋律創作方法は、小学校・中学校の実践において、子どもが主体的に活用することが出来る「足場」としての機能をもつ点で有用性がある。

第 4 節の実践において、本論で提案した創作方法を用いることで子どもは旋律を創作することが出来た。また方法は、つくられた旋律には、提案した方法に則ってつくられたものから、提示した方法に含まれない進行や構造を持ち合せたものまで多様な構造を生み出すことが可能であり、生徒自身の主体性を活かすことが出来る。ここに、本論で構築した旋律創作方法の有用性が認められる。

・J-POP 風の旋律創作は、児童・生徒の日常生活での音楽聴取経験を活かしながら活動を行うことが出来る点において、音楽科の創作教材としての教育的意義を有する。

作り手である児童・生徒が、授業内で教師が提示していない J-POP の音楽的特徴をリズムや旋律線の動きに見出し、それを旋律に取り入れようとしていた場面があったこと、日常生活での音楽聴取経験によって自身が形成した「J-POP らしさ」のあるサウンドを想起し、それに近づけようとする場面がみられたことなど、日常生活での音楽聴取経験を活かしながら、それを創作活動の「道具」として活用していた点に、当実践の教育的意義が見出された。

本研究の学術的意義は、次の 3 点に集約される。第 1 に、J-POP の教材的価値を、創作活動の観点から考察した点である。これまで J-POP を創作教材として取り上げた実践では、実践の検証までを完遂した学術的研究はみられなかったが、本研究は創作活動の教材開発のみならず、これに新たな知見を見出した。第 2 に、実践のための具体的な方法を、これまで音楽科での旋律創作方法と関連づけて提示した点である。このことによって、これまで J-POP 以外の音楽様式の創作実践に携わってきた教員にとっても行いやすい方法だと期待され、また、これまでの音楽教育学における創作研究の蓄積と今後の研究とを接続させることが可能となった。第 3 に、J-POP の旋律構造に関して新たな知見をもた

らした点である。これまでの J-POP の旋律構造に関する研究は、本研究で指摘した「同音への連続傾向」に関して分析と提唱を行った研究はみられなかった。この点から、本研究は J-POP を含んだ今後の日本の流行歌研究に寄与したと考える。

一方、本結論からは、次の 3 点の今後の課題が導かれる。

まず、流行現象と密接な J-POP のような流行歌を、創作教材として取り上げるためのさらなる知見を析出することである。次に、ポピュラー音楽のスタイルに基づいた教員養成カリキュラムを構築することである。3 つ目に、創作活動における「道具」の活用に関する示唆である。

実践において子どもは、日常的に親しむ J-POP のサウンド自体を「道具」として用いていた。それを可能にしたのは、教員による「足場」の設定であった。具体的には、概念的な「足場」として、「反復」などのアイデアが、「足場」として CD 音源が提供・活用された。彼らはその「足場」のもとで、J-POP の聴取経験から得た音楽的な様々な知識を「道具」として活用しながら旋律を創作したのである。

もし仮に、彼らにボサノバやテクノミュージックをつくるような授業を行ったとしても、彼らにとっては J-POP の創作に比べ困難な活動となったであろう。それは、日常的に経験する J-POP のサウンドが、彼らが活用可能な「道具」であるからだ。このことは、音楽科の創作活動において、子どもが学校音楽教育以外から得る音楽的な「道具」の活用可能性を示唆している。多くの子どもがもつ「道具」の 1 つは、2010 年代に生きる子ども達にとっては、J-POP である。だが今後、子どもを取り巻く音楽環境や文化が変化していく中で、その中心にある音楽が「J-POP」と呼ばれなくなる時代も来ると予想される。そうした時代が到来したときもまた、子どもの日常的な音楽経験に目を向け、それを創作活動に活用しようとする姿勢に教育的な価値があることを、本論は示唆している。今後、本論を 1 つの通過点として、学校音楽教育における創作活動が子どもの日常的な音楽生活に果たすことのできる役割を、実践と研究によって考究していきたい。